昨秋7年ぶりの都大会進出。名門横浜の系譜継ぐ指揮官

昨秋7年ぶりの都大会出場を果たした多摩大目黒。昨夏3回戦では、二松学舎と接戦を演じるなど実力は高まっている。今年の夏は、新たな歴史を切り開くべく、選手たちが自らを追い込んでいる。(取材・武山智史)

■「打倒二松学舎」の文字

昨秋、多摩大目黒はブロック予選を勝ち抜き、7年ぶりの都大会本戦出場を果たした。ブロック予選で2試合とも2ケタ得点のコールド勝ちという結果が示す通り、「打ち勝つ野球」を標榜する。学校の校舎は目黒にあり、放課後はバスで横浜市あざみ野にあるグラウンドへ移動し練習を行う。グラウンドはサッカー部と共用の人工芝グラウンドであるが、このグラウンドで練習できるのは週3日。そのため他の日は目黒の学校敷地内のグラウンドや駒沢球場を使う。眞弓禎史監督は「練習スペースや時間に限りがあるため、量よりも質を追求した練習をしています」という。

練習中、掲示しているホワイトボードに「打倒二松学舎」の文字が大きく書かれてある。昨夏、多摩大目黒は3回戦で二松学舎大附と対戦。5回を終えて4対3と1点リードで折り返す。その後同点に追いつかれても食らいついてきたが、終盤に2本のホームランを許し4対7で敗れた。「先輩たちは強気で試合に臨み戦っていました。その姿を見て強豪校には負けたくないと思いました」(佐敷祐太主将・3年=投手)。雪辱を期す新チームは「打倒二松学舎」を掲げて始動した。

■ 勝ち切る"強さ"を身につける

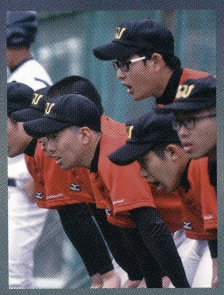
昨秋のブロック予選を勝ち抜いたチームは、都大会の初戦では甲子園優勝経験を持つ岩倉と対戦した。2対3で迎えた6回に一挙4点を奪い逆転すると7回にも2点を挙げ8対6で終盤へ突入。しかし8回裏、6点を失い8対12と夏に続いて終盤に逆転される結果に終わる。この2つの敗戦を通し、チーム内では「強豪相手に良い試合をしただけではダメ。最後まで勝ち切る」という目標が明確になった。

時間と場所に限りがある中、部員たちは工夫して練習に取り組んでいる。昨秋の大会前から佐敷主将ら上級生主体で朝練習がスタート。カラーボールを使った打撃練習で数多く打ち込み、その結果がブロック予選での大勝につながった。普段の練習でもロングティーやティー打撃を素早く行う「早打ち」、練習試合で対戦した国分寺から教わった「軸ティー」など、この冬場はバットを徹底的に振り込んできた。

■ 過去最高のベスト32超えへ

チームの課題は、昨夏、昨秋の敗戦で露呈した試合終盤の戦い方だ。そのため、日々の練習から終盤に集中力が切れないよう全員が一度集まって確認。「勝ち切る」ための意識を高めている。また、投手を含めた守備力向上も夏に向けて欠かせないポイントとなる。「投手陣では佐敷、左腕の安藤良平(3年=投手)に続く、ゲームを作れるピッチャーが必要です。練習は打撃練習に時間を割いているので、生きた打球で守備練習を兼ねています。効率の良い練習で、いかに短所を消していくかが大切です」(眞弓監督)

多摩大目黒の最高成績はベスト32。ベスト16の壁を突破することはイコール、強豪校に勝つことに直結してくる。今度は強豪校相手に"勝ち切る"。指揮官は「そのためにも普段の学校生活からしっかり取り組み、野球につなげてほしいです」と期待を寄せる。選手たちは、誰一人、2つの敗戦の悔しさを忘れてはいない。多摩大目黒はこの夏、今までとは違う姿を大舞台で披露する。



勝ちトレ 勝つための秘伝トレーニング ホーム試合前に体を追い込む

多摩大目黒が自校グラウンドで練習試合を行う際、試合前のウォーミングアップで体を徹底的に追い込む。柔軟やストレッチだけでなく腕立て伏せや腹筋、背筋、体幹トレーニング、最後は"おんぶダッシュ"と試合前にしてはハードな内容となっている。ホームの有利さを無くすために、あえて負荷をかけたトレーニングをして疲労が残った状態で試合に入るという。精神的な部分を鍛える側面もあり、ホームでの練習試合では欠かさず行われている。

多摩大目黒・眞弓禎史監督 選手自ら考えることが大切

「学校でも『自主自立』を指導方針にしていますし、私自身もあまり教え込むタイプではありません。自ら考えないと上手くならないですし、伸びないと思います。昨秋は岩倉さんに打ち負けて、悔しい思いをしたので夏に向かって、もう2ランクぐらい上のチームを、選手自身が作ってほしいです」

1971年神奈川県生まれ。横浜－日体大。現役時代は投手、外野手。大学卒業後、3年間のスポーツメーカー勤務を経て多摩大目黒に体育科教諭として赴任。野球部を創設し、監督に就任する。今年で監督19年目。「高校時代の恩師である渡辺(元智)監督の教えは、現在すごく生きています」と語る。